

## 演題 8. 舌に生じた乳頭状扁平上皮癌の 1 例

○古内 秀幸, 大平 明範, 星 秀樹,  
柴崎 信, 笹森 傑, 中谷 寛之,  
杉山 芳樹, 武田 泰典\*

岩手医科大学口腔外科学第二講座,  
同口腔病理学講座\*

乳頭状扁平上皮癌 (papillary squamous cell carcinoma) は主に口腔や喉頭の粘膜に生じ, 改訂された WHO 口腔粘膜癌と前癌病変の組織学的分類 (1997 年) より新たに取り入れられた疾患である。本邦における報告は極めて稀であり, 疣贅状癌と混同されているものもあるが, 病理組織学的には浸潤性の扁平上皮癌に分類される。今回我々は, 右側舌に生じた乳頭状扁平上皮癌の 1 例を経験したのでその概要を報告した。【患者】55歳, 女性。【初診】平成15年11月17日。【主訴】右側舌下部の腫瘤が気になる。【既往歴】高血圧症にて通院中。【家族歴】特記事項なし。【現病歴】平成15年8月頃から右側舌下部に腫瘤を自覚したが, 疼痛がないため放置していた。その後, 徐々に増大を認め, 同年11月に某歯科医院を受診し, 精査加療目的に当科を紹介され来院した。【現症】体格中等度, 栄養状態良好。口腔外所見は顔色良好, 顔貌左右対称で, 両側顎下部に大豆大の可動性を有するリンパ節を各1個触知し, 頸部リンパ節は触知しなかった。口腔内所見は右側舌下部に20×12mm大の境界が比較的明瞭で乳頭状に増殖する腫瘤を認め, 周囲に僅かな硬結を触知した。【処置および経過】右側舌癌の臨床診断のもと生検を施行し, 「疣贅状癌の疑い」の病理診断を得た。CT, 超音波検査では顎下, 頸部リンパ節に異常所見は認めず, 平成15年11月25日入院後, 全身麻酔下に右側舌部分切除術を行った。病理組織像では外向性に種々の程度の細胞異型性を有する扁平上皮の乳頭状増殖を認め, 結合組織内にも小島状を形成する異型細胞の浸潤を認めた。免疫組織化学的所見では Ki-67が陽性で, human papilloma virus, EB virus はともに陰性であった。病理組織学的診断は乳頭状扁平上皮癌であった。術後1年6か月の現在, 再発, 転移を認めず経過良好である。